HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域を越えた異業種交流からの創造的地域づくり
Author(s)	敷田, 麻実
Description	人が集う観光活性化術 : 第2回
Citation	市政, 60(8), 52-53
Issue Date	2011-08-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46951
Type	journal article
File Information	shikida_shisei.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第2回 人が集う観光活性化術

地域を越えた異業種交流からの創造的地域づくり

北海道大学観光学高等研究センター教授
敷田麻実（しきだあさみ）

小田原という大都市近郊

東京駅から新幹線で35分、都心への通勤圏に含まれる小田原市は、大都市との「適度な距離」が魅力の、人口約20万人の地方都市である。同市は神奈川県西部に位置し、地域のシンボル小田原城とかまぼこの生産で広く知られている。市の面積は神奈川県の約5％を占め、西側に箱根連山に続く山地、東には丘陵地帯が広がる。中央部には川幅が広い酒匂川（さかわがわ）によってつくられた足柄平野があり、相模湾に面する海・山・川がそろった地域である。

小田原市の中心には、新幹線駅や市役所などの官庁、商店街が集中している。鉄道路線の結節点であることから、週末は小田原に集まる買い物客で商店街もにぎわう（写真1）。しかし、小田原市の観光客数は約500万人（2010年）であり、観光資源として小田原城を有しながらも、近隣の箱根町の観光客数約2000万人（同年）に比べれば少ない。むしろ箱根温泉を訪れる観光客の「乗り換えのための場所」として近年は位置付けられてきた。また、アクセスが便利なことから、都心への通勤圏にもなり、さらに地域外からの工場立地が多く、身近な地域資源を生かしてというより、都市での雇用や地域外の企業に「依存」することで小田原市は地域を維持してきた。

こうした地理的・経済的な設定は、実は大都市に近い全国の中小都市が共通して持つ悩みでもある。地方分権が進み地域自立まで求められる中、地域としての主張ができる一部大都市と比較して、自立あるいは自律に向けてどのような地域戦略を練るのか、多くの地方都市は悩んでいる。そこで、今回は小田原市近郊の事例を紹介し、都市との関係を維持しながら、地域資源を戦略的に生かす地域戦略について解説したい。

勉強会の誕生

小田原市と南足柄市などの小田原・足柄地域を中心に、100名近いメンバーが参加した「小田原足柄異業種勉強会」（以下「おだあし勉強会」）がある。それは、同地域の多様な職業の人々が参加した、それぞれの仕事の充実と地域振興の両方を目指す、ゆるやかなネットワーク組織である。

会の活動のスタートは、2008年春にさかのぼる。市長選挙を機に、地域の将来に関心を持つ若い住民による有志の会が発足した。何度か集まりを持つうちに、思いを主張しているだけでは何も変わらないので、実践しようという動きになった。しかし、意識は高いが実際に何をどうすればよいのか分からないということで、同年11月におだあし勉強会の結成に至った。

と、ここまでは、地域づくりでよく聞く話である。しかし小田原・足柄の特徴はその後の経過にあった。勉強会はスタート時の理念に従い、多様な関係者が「ゆるく・楽しく」のコンセプトで活動している。現在活発に活動している休耕田の回復を目指す「田んぼプロジェクト 2010」では、都内からも参加者が水田の世話にやって来る（写真2）。地域内の関係に加え、地域資源とそこにつながる人々の魅力を利用して、地域外からも自由に参加する仕組みである。それは、よくある「評価の高い専門家を地域外から呼んで指導を受ける」という活動ではない。地域外と地域内の関係者を地道に結びつける活動である。

「おだあし勉強会」の魅力

おだあし勉強会が持つ最大の特長は、地域資源の「戦略的利用」を可能にするネットワークである。多くの地域づくり組織が、当初の理念を忘れて地域内の融和を図るだけの「お楽しみ会」化するか、地域にある既存の仕組みの中に組み込まれてゆくのに対し、おだあし勉強会は、地域内外の関係者をゆるく結びつけることで、独自の成果を挙げている。

ではそれを可能にしている要因は何だろうか。

まず、参加者の多様性である。地域づくりでは気が合う同志が集まることが多く、その「ノリ」に合わなければ参加しづらい雰囲気がある。しかし、おだあし勉強会は「異業種」の参加で成り立っている。会員には米穀店、豆腐店、書店、居酒屋、税理士、住職、靴店、質屋などが含まれ、およそ地域にある「商売」は一通りそろう。それに加えて自治体職員も「市民として」参加しており、参加者の多様性は高い。このように仲間同士の「閉じた関係」に偏らずに、異業種の多様な連携や協働から共通の利益を生み出す仕組みが優れている。

次に、ゆるく楽しくの活動コンセプトにもあるとおり、活動に強制はなく、あくまで自分の生活や仕事を維持しながら、余力の範囲での活動を続けられることだ。ただし、それは仕事が主で、余暇活動であるおだあし勉強会は従ということではない。田んぼプロジェクト活動は、早朝からの草取りや田植えなど、ほとんど「農業」に近く、かかわりが深いメンバーは、「主従が逆転」している。しかしそれでも維持できるのは、勉強会の活動からの本業への還元や、地域で仲間とやっていく楽しさが実感できるからだ。おだあし勉強会は、一見矛盾する「タイトなゆるさ」でマネジメントしている活動だ。

最後に、地域資源の活用のための、地域外との創造的な連携の推進に触れておきたい。地域づくりはどうしても抽象的な運動や理念追求になりがちである。また、地域資源から離れて、マーケットである都市だけを見て、「ウケ」を狙いがちにもなる。特に観光地域づくりでは、観光客を呼ぶことに注力してこの傾向が強まる。しかし、それではせっかくの地域づくりが、再び単なる「地域の切り売り」になってしまう。その点では、おだあし勉強会は地域外からの参加者を受け入れて、地域づくりのための創造的な活動に参加してもらう仕組みを持っている。それは都市部からの支援でも、地域資源の切り売りでもない、地域と都市部との新たな関係性の構築である。

都市との創造的な協働

観光地域づくりの基本である地域資源の戦略的利用とそこから得られる利益の地域還元は、何も観光だけで実現できるのではない。地域活動をうまく地域外に開くことで、地域外からの活動参加者が増え、地域は豊かな「関係」を地域外と持つことができる。外に開いてこそ地域づくりである。

また都市部だけに創造的な仕事や活動の機会があるのではなく、地域資源に恵まれた地域にこそ、それはある（写真3）。

小田原・足柄地域の事例から学ぶことができるのは、地域外の参加者も含めた開かれた地域活動・交流を前提とした「交流地域づくり」の可能性である。

写真1）買い物客でにぎわう小田原市のお堀端通り商店街

写真2）おだあし勉強会での「田んぼプロジェクト」（写真提供：小田原足柄異業種勉強会）

写真3）平野部を流れる酒匂川

略　歴

敷田麻実（しきだあさみ）

石川県加賀市生まれ。高知大学農学部栽培漁業学科卒業後、1983年より石川県水産課に勤務。その間、1990年から1年間オーストラリアのジェイムスクック大学大学院に留学し、沿岸域管理学を専攻。帰国後、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程修了、博士号を取得。1998年石川県庁を退職し、金沢工業大学環境システム工学科助教授、2002年から同教授。2004年から金沢工業大学情報フロンティア学部情報マネジメント学科教授。2007年4月から北海道大学観光学高等研究センター教授。野生生物保護学会前会長。専門はエコツーリズムと地域マネジメント。